

真観本「寿永百首家集」

— 私家集研究の大河の中で —

小林 一彦

はじめに

和歌文学研究は昭和三十年代（一九五五）から著しい活況を呈してきた。それに拍車をかけたのが『和歌文学大辞典』（明治書院、一九六二年）と、和歌史研究会による『私家集大成』（同、一九七三〜六）の刊行であった。かつて、井上宗雄氏、片桐洋一氏との座談会（田中登氏司会）で、その意義について触れたことがある。^{〔1〕}けれどもそれは和歌文学会が結成されて以降の研究史をたどる機会での発言で、和歌の研究は、はるかに古い歴史をもっていることは言うまでもない。宝亀三年（七七二）五月七日の序文をもつ藤原浜成の『経標式』には、すでに歌病や歌体についての論及が見られる。小稿では、特に私家集研究のなかで、寿永百首家集に焦点を絞り、いささか個人的な関心から、研究ノートとしてまとめたものである。

一 忽然として現れたもうひとつの『三十六人集』

明治書院版『和歌文学大辞典』は、和歌にかかわる約四五〇〇項目を収載、解説したもので、まさに大辞典と呼ぶにふさわしい空前の規模を誇る。しかしながら、「自由律短歌」の次は「守覚法親王」となっているように、項目はもとより、そればかりか大冊のどこを探しても「寿永百首」の名は存在しない。「月詣和歌集」は立項されており、文化五年の清水浜臣の校本に欠脱歌があること、安政五年の横山由清『月詣和歌集補』によって補ってもなお序文にいう一二〇〇首には一二二首不足すること、さらに特異な組成や主要な歌人の入集歌数、また歌風などが的確にまとめられているが、撰集資料については「賀茂別雷社に月詣でをする人々の歌を中心に撰んで奉納したもの」と触れるに過ぎない（執筆担当は島津忠夫氏）。当時「寿永百首」という術語が、いまだ影も形もなかった事実を物語るものであり、はなはだ興味深い。

では、いったい「寿永百首」という術語は、いつから生まれ、定着したのか。

この分野の研究に先鞭を付けたのは谷山茂氏「千載集と諸私撰集（二）——類型と個性とに関する基礎的調査——」（『人文研究』三一―、一九五二年）であった。『和歌文学大辞典』が刊行される少し前のことである。氏の論文は『千載和歌集』と同時代の私撰集との関係について解明を試みたもので、必ずしも「寿永百首」を主に扱ったものではなかったが、その影響は大きかった。すなわち『月詣和歌集』の序文に、「いそのかみのふりにしあとをまなび、三十六人の百首をあつめて神の御たからにそなふ」とあることから、

重保は曾つて当時の歌よみ三十六人の百首をあつめたこともあるらしく、その百首もまた当然月詣集の撰集資料となつたことであらう。

と言及、そしてこの記述の末尾に付された施注こそ、その後の研究を大きく導く契機となったのである。

重保が撰んだ当時の三十六人の全部が誰々であつたかは知る由もない。しかし、この百首歌奉納の挙によつて、当時の有名無名の歌人たちにわが歌を整理させ、またその家集を後世にのせさせる機縁を作つた功績は大きい。この百首歌募集に応じたかと思はれる人々をあげてみると次の如くである。

このように書き出された注は、四頁に及んでいる。谷山氏は家集の奥書、歌数、また『月詣和歌集』への入集状況などから、殷富門院大輔・藤原資隆（禪林瘡葉集）・藤原頼輔・平経盛の四名の家集が重保の求めに応じて自撰されたと指摘された。氏が各家集より摘記された部分を、以下に引用する（本文は適宜『新編私家集大成』などによつた）。

「賀茂の神主重保よみたらむ歌ともかきあつめてみやしるにおさめむとまうせは、書てをくるとておくに」
（殷富門院大輔集）

「ゆふたすきかけまくもかしこきみやしるに、をさめまうさるへきよしつたへうけたまはれはりて、いなひ申さむこともおそれあり、（中略）ふかきちきりをむすひをきたてまつらんかために、さためをくられたるかすのま、にひろひあつめて、しつかなるはやしのやまへる葉の集となつけはへりぬ」（禪林瘡葉集）
「右三十一字之風情、漸雖滯華詞、百余首之露点尤可詵草聖也、然而齡滿七旬、位昇三品、是偏神恩之至也、更非人力之及歟、因茲深為謝神德、曾無顧人嘲專終自書之功、不交他筆之跡、今以六義進納之、（中略）
寿永元年六月廿八日、從三位行刑部卿藤原朝臣頼輔」（頼輔集）

「神主重保依願請」当世好士各和歌百首可進納神殿云々、不用固舞仍惣注出、（中略）寿永元年六月十日、参儀正三位行太皇太后宮太夫修理大夫備前權守平朝臣経盛」（経盛集）

さらにこのほか鴨長明の家集も有力、また惟宗広言集、入道大納言資賢集などの成立も重保が奉納百首歌を求めたことと関連するところがあるのではないかと付言された。この段階では、三十六人の歌人は、殷富門院大輔ら四名に、長明・広言・資賢ら候補者三名を加えて七名であった。

三年の後、『桂宮本叢書 第五卷 私家集五』（養徳社、一九五五年）が刊行された。解題執筆は伊地知鐵男・橋本不美男の両氏である。「禪林蔭葉集」の解題には、

卷末自跋によれば、ある人の勧進により、当時の歌人達と共に某社に奉獻するため自撰し、書名も自らの命名であることが判明する。しかも集中「賀茂のみやしるのうたあはせに」「御社の歌合に」「当社の歌合に」の詞書を有する三首は、治承二年三月賀茂別雷社歌合中に見出される。即ち詞書の御社、当社に該当する賀茂社に奉納した家集であり、別雷社歌合も歌人である賀茂社神主重保の結構によつたものであるので、この家集奉納の勧進も重保によるものかと考へられる。然して本書に収めた頼輔・経正・経家・季経の各集も、各集の組織と内容をなす歌の判明する年次の下限から考へて、之と規を一にするものとも考へられ、とすればこの集の成立も、寿永元年夏のころであらうか。

と考証が展開され、これにより平経正・藤原経家・藤原季経ら三名が新たに賀茂社奉納の家集に候補として加わった。ただし、「季経入道集」の解題では

所収歌の下限は明瞭には指摘できないが、刑部卿頼輔が従三位に叙せられた寿永元年四月十三日までは判明する。集歌数が百首前後、詠歌の下限が寿永元年夏といふ以外に、なんの根拠もないが、或ひは頼輔、資隆、経正ら各集とおなじく賀茂社奉納の家集かとも疑はれる。しかし又一方本書奥書の「建久元年五月十三日自書写之」は或ひは季経自身の文ではなからうかとも疑はれる。

とあり、慎重な態度も見せていた。

ほどなく、谷山茂氏・樋口芳麻呂氏の解題による古典文庫『未刊中古私家集一』（一九六一年）が出版され、所収の「平経盛集」の解題において、やはり重保勸進の家集である可能性が指摘された。

二 術語「寿永百首」の懐胎— 私家集研究の活況から

個々の私家集の紹介から、分析の対象が広がりつつあった重保勸進の奉納百首家集を、精力的な私家集研究の立場から推し進めたのは、森本元子氏である。氏は古典文庫『小侍従集 二条院讃岐集』（一九五八年）の解題にはじまり、「小侍従・大輔・讃岐とその家集」（『国文学』一〇—一二、一九六五年）に至るまで、「賀茂社奉納百首家集」に関する九本の論考を立て続けに公にされた。その成果は『私家集の研究』（明治書院、一九六六年）として上梓されたが、同書の中には「長方卿集」考、「有房の家集とその成立」そして「賀茂社奉納百首家集について」の新稿三篇も含まれていた。

この時点においても「寿永百首」という呼称は、まだ登場していない。ただ、森本氏の初期の論考では「寿永元年（一一八二）当時行われた、かなり大々的な百首選の撰述」「この百首選（寿永百首家集群）は賀茂重保の主催にかかり、賀茂社に奉納されるとともに、そのまま「月詣和歌集」の重要な選歌資料となった」（以上、小侍従集）、「寿永百首選家集群の一つ」（二条院讃岐集）、次いで「寿永元年賀茂社奉納の自撰百首家集の一つ」（実国集）、「寿永年間に賀茂社奉納の目的で成った自撰の百首家集」（師光集）、また「例の寿永元年（一一八二）賀茂重保による賀茂社奉納百首選の一つ」（上西門院兵衛集）などと叙述されていたものが、次第に「賀茂社奉納百首選」（殷富門院大輔集）などシンプルなものへと変化していく経緯はたどることができる。さらに「寿

永元年（一一八二）夏秋の間、賀茂重保の勸進に応じて、多くの歌人が自詠百首を撰び、賀茂社に奉納した。「寿永初年に成った百首選の家集は、おそろくたいていこの奉納百首に入れてよいであろう」との見通しも示されていた。

そして同書の第五章には「（付）賀茂社奉納百首家集について」という小項目が立てられており、最終的にはこの名称へと落ち着いたと解せる。

森本氏は、「賀茂社奉納百首家集」の条件として、次の五つを提示された。

- 一 作者の自撰であり、自詠百首を本体とすること。（贈答による他人の作は別）
- 二 四季・恋・雑の組織をもつこと。ただし、各部の歌数は不定で自由。
- 三 題詠・生活詠の別を問わぬこと。詞書・題詞などの制限もない。
- 四 寿永元年夏ごろの成立であること。
- 五 集中の作が「月詣和歌集」にとられていること。

その上で、平安末期に成ったと思われる私家集を調査し、以下の二十五名の私家集を「三十六人の百首」の一群に入るものとして認定された。

藤原頼輔	平経正	藤原経家	藤原資隆	藤原季経	平経盛	平親宗
殷富門院大輔	鴨長明	惟宗広言	源資賢	藤原隆信	平忠度	源有房
小侍従	二条院讃岐	皇太后宮大進	藤原実国	源師光	藤原親盛	祝部成仲
登蓮法師	覚綱法師	寂然法師	寂蓮法師			

これでも、なお十一名が不足すると筆は継がれ、

上西門院兵衛 藤原長方

は加えられてよさそうである、さらに

藤原成範 法印静賢 祐盛法師 寂念法師 三河内侍

などは候補者になると思うが、はたしてどうであろうか、と慎重にその可能性に言及された。そして、「広範の階層を網羅しながら、これらの歌人たちに共通する一つの性格」として、俊成・俊恵・道因・清輔・西行・実定・頼政・教長ら、いわば一流歌人たちにくらべ「いずれも当代の歌界に現に活躍する歌人たちにはちがいないが、すべてけつして第一流の歌人として待遇されてはいない」ことを特徴に挙げられた。

ここに至り、森本氏により二十五名、プラス二名の二十七名、さらに可能性も含めれば三十二名の歌人が候補として提示されたことになる。

その後、杉山重行氏が森本氏の説をうけて、「なおこのほかに、歌合、百集歌などの場を通して重保と親交の深かったと考えられる歌人、あるいは『和歌文学大辞典』・「中古散逸撰集の項」の中でそれと考えられるような歌人たち」を、「例えば」として（括弧内は月詔和歌集への入集歌数）、

藤原実定（十八首） 中原有安（五首） 藤原実家（十四首） 勝命（十二首）

俊恵（十二首） 顕昭（十六首）

なども注視しておきたい、と言及された。⁽²⁾可能性は広げられ、この段階では定数を超える三十八名が、候補者として名前が挙がったことになる。

三 賀茂社歌圈の視点―歌人の交流から

はじめ「寿永百首」を論文題に掲げたのは、松野陽一氏「寿永百首について」⁽³⁾であった。松野氏は、先に森本氏が考証した二十五人の家集について、「定数歌の構成の家集」「自由な歌数の家集」と二つに大別、さらにそれぞれを階層化してより細分化し、十二の視点から分類整理された。氏によれば「三十六人の残りの顔ぶれを考える為の基礎資料としておこうと思う」という試みであった。「寿永百首」という術語の本格的な使用といい、いよいよ三十六人の追跡に拍車がかかったといつてよいだろう。ただし松野氏の論は必ずしも三十六人の家集を特定することのみに力点が置かれていたわけではない。特に森本氏が、

新興武門の勢力や僧侶集団、あるいは俊恵の歌林苑において培われた濃厚な歌人意識をもち、賀茂社家の強大な文化的勢力圏に糾合されて、堂上貴族や専門歌道家の作りなす歌壇とは全く別個の、といつても武家とか僧侶とか女房とかのみには偏し固まることのない、きわめて層の厚い、幅広い歌人社会を、おのずからにして形成していたと認められる。⁽⁴⁾

と指摘されていたことに注目され、松野氏は賀茂社歌圈と仁和寺歌圈という大きな視点から、この時期の家集蒐集と諸家集の成立を見取り図として描こうとされていたのである。

さて、三十六人の追跡だが、松野氏は、森本氏が提示された二十五名の歌人の私家集から、登蓮と資賢の二集を問題視された。考証は慎重に進められ、それぞれの家集が登蓮は二十五首、資賢は二十九首（他人詠四首を除くと自詠は二十五首）しかない残欠本、あるいは抄出本の可能性があるものの、『月詣和歌集』との共通歌が一首もないこと（同じく残欠本三十三首の皇太后宮大進の家集の場合は四首）、そもそも同集への入

集歌数が登蓮は六首、資賢は一首とわずかであること、などを主たる根拠に、「少なくとも現存両家集については、一応外しておくべきではなからうか」と提言されたのである。

こうして賀茂社歌園という視点から、歌合・歌会などへの参加、重保との親交が問題視されるに及び、歌人の伝記研究から、三十六人の家集をあぶり出そうとする機運が高まるのは必然であった。

井上宗雄氏は『平安後期歌人伝の研究』（笠間書院、一九七八年）において、「以下の私見は、従来の研究を確認するといった程度のものであるが、奉納者といわれている各歌人の伝記調査を中心に若干の考察を行いたい」と断りながらも、刊行にあたり新たに書き下ろされたという第六章「寿永百首家集をめぐる」は、実に一一〇頁にも及ぶ考証であった。⁽⁵⁾ 詳細については小稿ではとても摘記しきれないので、直接、井上氏著書によりたいが、氏の結論とされた点は以下のとおりである。

(1) 間違いない寿永百首家集を編んだ人

覚綱 有房 資隆 大進 師光 広言 讚岐 大輔 小侍従 長明 親宗 寂然 隆信 親盛
 経家 季経 経盛 忠度 経正 頼輔 寂蓮

(2) 寿永百首家集か否か若干不安のある人

成仲

(3) 寿永百首家集の人数に入ったと思われる人

兵衛 勝命 顕家 資盛 行盛 伊綱 三河内侍

(4) 寿永元年生存なら人数に入ったと思われる人

為業 敦仲

(5) 人数に入る可能性ある人

顕昭 頼円 覚盛 大炊御門右大臣家佐

(6) 主催者側という点で、躊躇される人

重保 祐盛

(7) 何ともいえないが、否定材料に乏しい人

季貞 親佐 季能 能盛 有安 康宗 季広 覚延 維順女

(8) 人数に入る可能性絶無ではないが、乏しい人

長方 成範 実国 資賢 澄憲 範玄 長貞

(9) 恐らくは人数に入らなかったと思われる人

静賢 隆房 定家 公衡

(10) 人数に入らなかった人（入っても物故して結果的に入らなかった人）

登蓮

右によって、(2)以下をこの順（ランク）に数えて三十六名を撰ぶという事になるのではあるまいか。如上の井上氏の考証に従えば、(1)覚綱・有房、(6)重保・祐盛まで、合計すれば三十七名で定数を超える、ということになる。

四 「寿永百首」という術語と概念

『和歌文学大辞典』（明治書院）には存在しなかった「寿永百首」だが、戦後の私家集研究の隆盛をうけて、昭和末年ころには各種辞典類に陸続と立項されるに至る。

「寿永百首」をはじめて項目として明記したのは、有吉保氏編『和歌文学辞典』（桜楓社、一九八二年）であった。大型辞典ではない、コンパクトな辞典であるにも拘わらず、かなりのスペースが割かれている。谷山氏以来、私家集の本文研究や歌壇、伝記研究に秀でた研究者たちによる、これまでの旺盛な研究を反映した結果といえるであろう。記述には、その蓄積が過不足なく盛り込まれていた。

『月詣和歌集』（賀茂重保撰、寿永元〔88年—11月成る〕の仮名序に「三十六人の百首をあつめて、神の御宝にそなふ」とあり、重保は『月詣和歌集』編纂のための撰集資料として、当代の歌人三十六人に賀茂社奉納の百首家集の提出をもとめている。これに応えた歌人三十六人の百首形式の家集に対する称で、賀茂社奉納百首家集ともいわれる。

定義づけにはじまり、谷山・森本・松野・井上の各氏の名前を挙げ、主な特徴として森本氏が示された五つの要件、さらにこれらの条件を満たす集として井上氏が先記(1)に、間違いなく寿永百首家集を編んだ人、として提示した二十一の歌人の家集を列記し、「なお、残り一五人の家集については今後の検討が俟たれる」と付言している。

次いで、刊行された『和歌大辞典』（明治書院、一九八六年）にも項目が立ち、「経盛集・禅林瘵葉集（資隆）・経正集・忠度集・頼資集・親宗集など約二五の現存家集が同百首家集と推定されている」（執筆担当は松野陽

一氏」とあった。「約二五」という数は、森本氏の考証を継承したものであろう。さらに最新の『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、二〇一四年）の「寿永百首」では「師光・親盛・季経・頼輔・広言・経盛・忠度・経家・経正・成仲・長明・寂蓮・覚綱・讃岐・小侍従ら約二二の家集が同百首家集として自撰されたと考えられている」（執筆担当は辻勝美氏）とあり、その数が「約二二」へと後退したのは、井上氏により三名の家集について疑問が提出されたことをうけた結果であると考えられる。井上氏は考証の末に「二十五集が寿永百首とされている内、登蓮集が除かれ、実国・資賢の二集が五割ほど怪しい。あと成仲に若干の不安はあるが、一応含めると、二十二集がまず確実といえる」と結論を下されていた。⁶⁾

この間、一九八三～五年にかけて『日本古典文学大辞典』全六卷（岩波書店）が刊行されている。その中に「寿永百首」の項目はないが、「賀茂重保」の項には「寿永元年（一一八二）夏頃現存歌人三十六人に、百首から成る家集（寿永百首家集）を賀茂社に奉納せしめ、同年十一月にそれらを資料として『月詣和歌集』を撰んだ」（執筆担当は半田公平氏）とあるほか、「月詣和歌集」の項では、

序文に「三十六人の百首をあつめて、神の御たからにそなふ」とあるように重保が三十六人の歌人に賀茂社奉納百首（寿永百首家集）を求め撰集の資料とした。現在、寿永百首家集として認定されているのは、藤原頼輔・平経正・藤原経家・同資隆・同季経・平経盛・同親宗・殷富門院大輔・鴨長明・惟宗
 広言・源資賢・藤原隆信・平忠度・源有房・小侍従・二条院讃岐・皇太后宮大進・藤原実国・源師光・藤原親盛・祝部成仲・登蓮・覚綱・寂然・寂蓮の各集計二十五集である。ただし右の内資賢・実国・登蓮の三集に関しては疑問の余地がある。また、右の三人以外の十一人については、具体的に誰を挙げるかは諸説がある。

と、さらに詳細な記述が見える（執筆担当はいずれも半田公平氏）。なお『日本古典文学大辞典』では、「覚綱集」に「成立年次未詳。但し、本集は寿永百首家集の一つと思しく、その成立は治承年間末（一一八一）頃以降か」（執筆担当は川村晃生氏）、「惟宗広言集」に「寿永元年（一一八二）夏ごろ自撰されたか。賀茂重保の勧進により賀茂社に奉納された寿永百首家集の一と見られる」（半田氏）など、このほか多くの家集および歌人の項目にも、これまでの私家集研究の成果が盛りこまれていた。

五 天竺星と地斂星—冷泉家時雨亭文庫の開扉、未知の私家集群との遭遇

昭和末年、朝日新聞社から冷泉家時雨亭叢書の刊行が開始された。寿永百首家集では『中世私家集 一』（朝日新聞社、一九九四年）には、「寂然集」「隆信朝臣集」が、続いて『中世私家集 二』（一九九五年）に「禅林瘡葉集（資隆）」「二条院讀岐集」「忠度朝臣集」「経正朝臣集」「刑部卿頼資集」「惟宗広言集」「鴨長明集」「入道三位季経集」「成仲集「断簡二枚」」が、さらに『中世私家集 三』（一九九八年）に「有房中将集」が、それぞれ影印公開された。解題担当は井上宗雄氏、久保田淳氏である。

『中世私家集 一』の解題では、「寿永百首家集および『成仲集』断簡について」という項が設けられ、「平安後期の和歌史を叙述する際、幾つかの現存家集の総称として寿永百首家集乃至は寿永百首という呼び方が用いられている。（中略）この時期の研究者によって用いられ始めた和歌史上の術語である」（久保田氏）と定義づけの後、確実視されている二十一集に加えて「成仲集」もその一と見られるとし、冷泉家時雨亭文庫蔵「成仲集」断簡の紹介がなされている。

ところで、冷泉家時雨亭叢書は、時雨亭文庫蔵本の全容が明らかとなつてからの刊行ではなく、調査と並

行しながら順次刊行がなされてきた。たとえば擬定家本「如願法師集」が『中世私家集 五』(二〇〇一年三月)に単体で収載され刊行されたことなどは、後に「擬定家本私家集」という呼称で一括される鎌倉時代の私家集の写本群が、未だ名称すら持たなかった当時の状況をよく反映していると言えるであろう。

そのような中で、冷泉家時雨亭文庫調査主任の藤本孝一氏は、『古写本の姿』(至文堂、二〇〇二年九月)において「表紙を中心とした冷泉家本の分類」を提示された。⁷⁾氏は「真観本」に言及した箇所ので、

『在良朝臣集』は版木に丁子を塗った上に料紙を置いて文様を摺り出している。粘葉装で、ほぼ図柄も続いた一枚の料紙を包表紙に用いている。『範永朝臣集』と同じ真観本であることが、表紙料紙から証明できる。

さらに、図柄が違うが平安時代後期の歌人藤原惟方の『粟田口別当入道集』が『範永朝臣集』と同じ具引きの表紙であり、平安時代後期の歌人源資賢の『入道大納言資賢集』も、空摺りした包表紙を用いているところからこの二つの歌集も真観本と推定できる。

同じグループと想定できるものに、寿永百首家集がある。これは寿永元年(一一八二)に賀茂重保が『月詣和歌集』を専修^{つぐ}するために、百首形式の私家集を三十六人の歌人に依頼したものである。この家集を建長年間に書写したものが冷泉家に襲蔵されている。装訂は、両者とも粘葉装で栗色染めの料紙を用いた原表紙をもち、題の打付け(書名)の筆跡や本文料紙も同じである。三十六人中巻頭図版にある『隆信朝臣集』『忠度朝臣集』『経正朝臣集』『刑部卿頼輔集』『入道三位季経集』『二条院讚岐集』『惟宗広言集』など、十数点が伝わっている。

と、寿永百首家集の研究に、書誌学上の知見から新たな指摘を加えられた。

その後、叢書の『平安私家集 十一』（二〇〇七年二月）および『平安私家集 十二』（二〇〇八年四月）の解題では、「真観本私家集について」「再び真観本私家集について」の項が設けられた（いずれも田中登氏の執筆）。前者では、「禅林瘀葉集」「二条院讚岐集」「有房中将集寿永百首本」の三本が、建長六年（一二五四）二月の真観自筆署名入り奥書をもち基準となる「範永朝臣集」と同筆であることが報告されている。また後者では、「寂然集」「隆信朝臣集」「忠度朝臣集」「経正朝臣集」「刑部卿頼輔集」「惟宗広言集」「入道大納言資賢集」「鴨長明集」「入道三位季経集」「成仲集」「有房中将集寿永百首本」を「一連の寿永百首家集」に分類、前者とあわせた十三集を寿永百首として認定している。

藤本氏も叢書の月報での連載「冷泉家時雨亭文庫蔵本の書誌学 その二十二」（二〇〇七年二月）⁽⁸⁾において、叢書に収録されている十二集の寿永百首（寂然集・隆信朝臣集・禅林瘀葉集・忠度朝臣集・経正朝臣集・刑部卿頼輔集・惟宗広言集・鴨長明集・二条院讚岐集・入道三位季経集・成仲集断簡・有房中将集寿永百首本）について、次のように発言された。

筆者はこれらは真観本であると判断する。その理由は、真観本の共通性のうち、次の五項目が認められるからである。

- ① 原表紙に茶色包表紙を用いる。
- ② 外題が、真観奥書がある『範永朝臣集』等の筆跡と共通する。
- ③ 本文料紙は白地の楮紙打紙である。
- ④ 大きさは四半本である。
- ⑤ 装丁は粘葉装である。

特に『禪林瘡葉集』には「建長五五七書写一校了」と、建長五年五月七日の書写與書がある。この建長年間（一二四九―一五六一）は、真觀の書写が活発に行われた時期である。

この時、藤本氏が示された十二集には「入道大納言資賢集」は含まれていない。

さらにその後、展覧会「冷泉家 王朝の和歌守展」が、二〇〇九年秋に東京で、翌年春には京都で、それぞれ開催された。この展示の最大の特徴は、冷泉家時雨亭叢書完結記念と銘打たれただけあって、叢書刊行の調査で明らかとなった写本群が、プループごとに展示されていた点にある。この時の図録（朝日新聞出版、二〇〇九年一〇月。以下「展示図録」）には、冷泉家時雨亭文庫所蔵の典籍が四三八点、すべてオールカラーで収録、掲載されている。章立ても調査の過程で次第に明らかとなった典籍、特に私家集の写本群ごとに構成されており、展示室さながら、私家集のまたとない貴重な標本集となっている。研究者必備の書といつてよい。たとえばカラーで定家表紙本ばかり一堂に並べた見開きなどは壯觀で、表紙の色や文様、形状や大きさ、外題の筆勢や運筆、文字配りなどまで一目でつぶさに把握、比較することができる。真觀本私家集も四頁にわたって特集が組まれていた。「寿永百首表紙集」の写真も掲載されている。そのキャプションには、看過できない小字の短い文章が付されていた。

寿永元年（一一八二）に賀茂重保が私撰集『月詣和歌集』撰集の資料として三十六人の歌人に依頼して提出させた百首形式の歌集群があり、寿永百首本と呼ばれている。表紙の一体性から、真觀も寿永百首本の集成を企図していたと考えられる。

鎌倉時代に真觀（藤原光俊）が書写した「寿永百首家集」が、物体としてまとまって出現した事実を、どのように受けとめればよいのだろうか。



真観本私家集



真観本 寿永百首家集 栗皮包表紙



下の三本が栗皮包表紙



入道大納言資賢集

六 寿永百首家集の発見と蒐集—真観の私家集研究

そもそも、真観は三十六人の家集の集成を目指していたのだろうか。この点について検証してみたい。

まず、十二集である。叢書の解題および展示図録によれば、これらは確かにすべてが栗皮色包表紙、粘葉装である。現状では「寂然集」が後補包背装の大和綴、「禅林瘡葉集」は後補白紙包表紙の二箇所仮糸綴、「鴨長明集」は鳥ノ子紙後補包表紙の紙釘装大和綴だが、それぞれすべて、もとは粘葉装だったという。このほか栗皮色の原表紙でありながら、「二条院讀岐集」「忠度朝臣集」「惟宗広言集」「入道三位季経集」が大和綴、「経正朝臣集」「刑部卿頼輔集」が紙釘装となっているものも、もとは粘葉装という。なお、「隆信朝臣首」は解題をそのまま引くと「もと粘葉装で包背装。江戸期に大和綴に改装。洪引表紙で、少し水汚れがある」とある。けれども、図版（75頁下段掲載）の八集を見ると、他の七集と同じ表紙であることは一目瞭然である。「隆信朝臣集」だけが『中世私家集 一』の所収で、後統の他の七集を収める『中世私家集 二』『中世私家集 三』の刊行までに時があり、その間に一連の表紙については「栗皮色包表紙」と呼称が統一された結果による用語の相違と思量される。叢書の刊行ごとに調査を進めつつ、平行して解題もまた執筆されてきたことの反映であり、注意が必要である。こうしたことも、展示図録では容易に確認が可能で、叢書の解題と共に併用されることを強く推奨したい。これら十二集のうち冊子本の十一集は、解題によれば寸法も縦二二・〇〜二二・二センチ、横一四・七〜一五・一センチの範囲にすべてが収まり、大きさも揃っている。同一規格の形状で、藤本氏の指摘されるごとく、グルーピングは十分に可能であると言えよう。

ところが、時雨亭文庫には、同じく栗皮色包表紙をもつ真観本私家集として「元良親王集」「大納言経信集」

「頭綱朝臣集」の三集の存在も確かめられる（『平安私家集 十二』所収）。大きさは、解題によれば「元良親王集」（縦二四・〇センチ×横一四・二センチ）、「大納言経信集」（二一・三×一四・一）、「頭綱朝臣集」（二一・六×一四・四）と記されてあるが、展示図録で三本横並びの姿を見ると、ほぼ同じ大きさで、微細に観察すれば「元良親王集」がわずかに小さいように見える（図版76頁上段参照。外題「兵部卿親王御集」とあるのが該本）。該本の縦寸は二一・〇の目盛りの読み誤りではなかったかと、写真の比較から想像されるのである。寿永百首家集の八集と、これら三本の表紙は同じだが、解題によれば三本は綴葉装であり粘葉装ではない。また大きさも、やや小ぶりである。三人の歌人はいずれも『月詣和歌集』が編纂された寿永元年をさかのぼること、はるか前に没しており、時代も合わない。

さて、ここで改めて問題となるのが、「入道大納言資賢集」である。井上氏は「実国・資賢の二集が五割ほど怪しい」とし、「人数に入る可能性絶無ではないが、乏しい人」の中に分類されていた。「入道大納言資賢集」は他人詠四首を含めても二十九首の小家集である。その奥書には「寿永元年八月六日書留返也」と記されていた。氏は集中に見える「故少将」は息通家、「中将」とは孫の雅賢であることなどを考証し、「何れにしる寿永元年八月六日という奥書の時点では、既に雅賢は中将だし、何れも整合するので、この辺を成立の時点としてよさそうである。寿永百首家集とする見解が起るのも当然である」と可能性については是とされる。それでも、「資賢の月詣入集の一首が家集と一致しない」「歌壇的地位は零に等しい」「元暦元年九月別雷社後番歌合に出詠しているのみである。しかもこれは寿永元年より後である」「今撰・続詞花に入らず」「月詣にもようやく一首である」「そういう資賢が果して寿永百首家集の人数に入りえたかどうか疑問である。少なくとも家集を提出して月詣に一首入集という事はないであろう」「ともかく権大納言に昇り、上流貴族の一端に

入った人物を、寿永百首家集の作者にしたらどうか」と七項目を列記し、「疑わしい」との見解を示されていた。⁽¹⁰⁾井上氏は『中世私家集 一二』の解題でも、やはり「寿永元年八月という年時から、この家集が寿永百首家集とみてよさそうなのだが」としながら、同じように否定的な理由を列記され「寿永百首家集の一とすることには問題があろうとも考えられる」ことを再説されている。ただし、

一方、現在みる『入道大納言資賢集』は草稿本（未精撰本）または抄出本の類で、歌壇的に活躍してはなくとも、その妻は賀茂保文（『尊卑分脈』による。保久のことで、すなわち重保の再従兄か）女であり、重保が和歌を嗜む資賢に家集奉納を進めた可能性はあろう。

と新たな視点から肯定的な見解を追加されている。その上で、

結論は明確に出せない。寿永百首家集の残欠ないしは抄出本の可能性が皆無ではないが、この時期、俊成の『保延のころほひ』、光頼の『桂大納言入道殿御集』ほか小規模家集が幾つかあり、この集もそういう一つとして撰ばれたのかもしれない。成立事情は現在不明とするのが無難である。

と結論を留保されたのだった。

しかしながら、『中世私家集 一二』の刊行時点（一九九五年）では、冷泉家時雨亭文庫の私家集を形態から腑分けして弁別する手法は、まだ主流ではなかったといえる。「擬定家本」という術語さえ、確として存在していなかった時期である。『冷泉家の秘籍』（朝日新聞社、二〇〇二年）は、時雨亭文庫の精髓、国宝や重要文化財など一八九点を、原則として原寸大のオールカラーで収録した豪華本であり、展示図録『冷泉家 王朝の和歌守展』（二〇〇九年）とは自ずと目的も性格も異にしている。それでも七年の歳月を経て、時雨亭文庫の収蔵典籍への視線が、特に膨大な量の私家集に対する関心の度合いが、調査の進展と共に変化してきた

ことを見てとることができる。ようやく、わたしたちは真観の意図するところに迫りついたというべきかもしれない。⁽¹¹⁾

形態から見た時、真観本「入道大納言資賢集」は、真観本寿永百首家集の十二集とは、まるで本の作りが違ふ。写真で見ても、表紙は美しい水辺草花に水鳥を摺出した包表紙であり、一連の栗皮包表紙ではない。叢書の解題によれば、料紙も楮紙打紙ではなく斐紙であるという。縦二・三×横一四・五と、わずかな差だが十二集のどの家集よりも縦に長く横に短い。やや細長い形状をしており、大きさも異なっている。真観は、造本から推して、明らかに十二集とは別物だという意識で、つまり寿永百首の三十六の家集には含まれない、と判断した上で、書写を行っていたと考えざるを得ないのである。しかも真観は「寿永元年八月六日書留返也」という、普通なら一見して寿永元年の百首奉納家集だと確信させるような奥書をもつ親本を書写していたにも拘わらず、である。私家集研究を領導してきた屈指の研究者たちが、こぞって挑みながらも、その果てに結論を留保せざるを得なかつた高い壁が、「入道大納言資賢集」であつた。有力な「寿永元年八月」という奥書の情報などは問題とせず、却下できるほどの、たとえば井上氏が迫り得た七項目を凌ぐような、もつと確かな反証を、真観は見つけ出していたとしか思われないのである。

結 語 — 私家集研究の大河の中で

建長年間には、あるいはまとまって三十六人の寿永百首家集が存在しており、労せずして真観はその一揃いを書写することができたのであろうか。しかし、そのような可能性は蓋然性が乏しい。「寿永百首」「寿永百首家集」「賀茂社奉納百首家集」等々の呼称は、一九六〇年代頃から用いられるようになった新しいものだが、

仮に往時、三十六の家集が一括して伝来していたとすれば、それらしき呼称が記録類に残っていてもよいはずである。しかしながら、そうした例はもちろん、物証の片鱗すら見出せない。また現在、寿永百首家集として有力視される二十二集の、各所に収蔵されているそれぞれの伝本にも、かつて一具の三十六家集であった痕跡は認められない。重保は寿永元年十一月成立の『月詔和歌集』の撰集に、定数歌や歌合など多くの資料を用いており、各歌人から個別に提出されてきた自撰の寿永百首家集もただちに活用されたとすれば、転写される間もなまに撰集の資料群のなかに埋もれてしまったと考えるのが自然である。もし仮に、三十六集の一揃いを真観が目にし得たとして、寿永から建長までの約七十年のあいだに、他の誰もがその存在にまったく気づかず、関心も示さなかったとは想像しにくい。

これまで、谷山茂・伊地知鐵男・橋本不美男・樋口芳麻呂・森本元子・杉山重行・松野陽一・井上宗雄といった各氏、いわば私家集研究を領導してきた屈指の研究者たちが、寿永百首という奉納家集の存在を発見し、さらに三十六人の百首家集を突き止めようと考証を深めてきた。それでも二十二―五の壁を越えられないまま、三十六人の全貌を明らかにするところまではたどり着けずにいた。こうした研究史の現状は、重保が三十六人から家集をほんとうに集め得たのか、という疑念さえ生じさせかねない。文治六年（一一九〇）に奉納された、藤原俊成『五社百首』の序文に「春日、日吉の社に歌合をしてみゐらせんとて、人人にすすめ侍りしかば、上達部たちもおほくことうけはしながら、何となくおくられざりしかば、今はとげがたかるべしとて、そのかはりに両社に、あやしくとも百首の歌をだにのみてたてまつらん、と思ひなりて（以下略）」とあることも思い合わされる。春日社と日吉社に奉納歌合をしようと人々に勧進し、殿上人たちも多くが承諾しながら、なかなか歌を送って寄こさない、それで俊成は単独の百首歌奉納に切り替えたという。重保の

奉納百首の勧進も、順調に運んだかどうか、百首から条件をゆるめて、百首前後なら許容する、詠み置いていた家集でも構わないと、各個撃破で集めるようなこともあったのだろうか。「寂然集」「惟宗広言集」「忠度集（忠度百首）」など、部立ても整然とした定数歌百首に、長い詞書の歌や贈答歌を含む「刑部卿頼輔集」（一三一首）や「隆信朝臣集」（一四首）のような比較的自由的な家集とが混在している二十二集の相貌からは、そのようにも想像されるのである。

真観は歌書類の書写と蒐集を展開するうち、その過程で『月詣和歌集』の序文から「寿永百首」の存在に気づいた。独自の分析を進め、それが歌人相互間の連絡もないまま、構成も歌数も不統一の状態でそれぞれが独立した家集として成立し、個別に重保のもとに届けられた、いわば寄せ集めの三十六の百首、ないしは百首を概数とする家集群であったことを突き止めていたのである。谷山氏を先駆けとして井上氏に至るまで、昭和の研究者たちが追跡し続けた三十六名を、真観は独自の考証の末にあまり出していたと思しい。そしておそらく、賀茂別雷社への奉納百首家集を復元しおおせていたのではなかったか。

真観の私家集研究は、はるかにわれわれの想像を超えていたと思われ、驚くほかはない。時雨亭文庫から出現した、一揃いの栗皮色包表紙に粘葉装の家集群が、真観の飽くなき私家集の書写蒐集の一端を示す生き証人と捉えた時、波及する問題は小さくないと考えられるのである。

注

(1) 和歌文学会関西例会一〇〇回記念シンポジウム（京都女子大学、二〇〇九年七月四日）、和泉ブックレット『関西例会一〇〇回の歩みと和歌文学の動向』（和泉書院、二〇〇九年）として刊行された。

(2) 「月詣和歌集の考察―歌人構成・入集資料を中心として―」（『和歌文学研究』二十四号、一九六九年）。

- (3) 『和歌文学研究』(三十一号、一九七四年)、『鳥帯—千載集時代和歌の研究—』(風間書房、一九九五年)所収。
- (4) 『私家集の研究』二二〇頁。
- (5) これに増補改訂版(一九八八年)では、細字二段組で十四頁にわたる補注が新たに付されている。
- (6) 『平安後期歌人伝の研究』(笠間書院、一九七八年)五一—六頁。
- (7) 日本の美術第436号『古写本の姿』(至文堂、二〇〇二年)。
- (8) 叢書七十六卷『為和・政為詠草集』付載、月報七十八「伝来の歴史(十九)」。藤本氏『本を千年つたえる 冷泉家蔵書の文化史』(朝日新聞出版、二〇一〇年)第四章「対立する家から入った本(二)」—三井寺本・真観本」に再録された。
- (9) 当時は八十六巻で一旦完結。その後の調査を踏まえて、さらに十六巻が刊行され全百巻に、また別巻四巻が加わり二〇一八年四月に完結した(すべて朝日新聞社刊)。
- (10) 『平安後期歌人伝の研究』五〇七頁。
- (11) 二〇一五年四月刊行の冷泉家時雨亭叢書九十一巻『平安私家集 十三ノ擬定家本私家集 続々』解題の「三たび真観本私家集について」(田中登氏執筆)において、「入道大納言資賢集」は「二連の寿永百首家集」から除かれた。
- (12) 杉山重行氏『月詣和歌集の校本とその基礎的研究』(新典社、一九八七年)第三章「入集歌人・撰集資料の考察」参照。

〔付記〕 図版掲載の御許可、およびデータを御提供くださいました(公財)冷泉家時雨亭文庫に御礼申し上げます。

